

藤枝市史だより

第25号

平成24年1月31日発行
編集 藤枝市文化財課
発行 文化財・市史編さん係
〒426-0014
藤枝市若王子500 藤枝市郷土博物館
☎054-6445-1100

E-mail
muse@city.fujieda.shizuoka.jp

岡部親綱、花蔵の乱における謎の大手柄

今回ご紹介するのは、天文五年（一五三六）の花蔵の乱で庶兄の玄広恵探（良真）を倒し、一八歳で家督に就いた今川義元が、半年後の十一月三日に家臣の岡部親綱に与えた二通の文書です（花蔵の乱については『藤枝市史だより』六号と『藤枝市史』通史編上をご覧ください）。

Aの文書は、土佐藩士となった岡部家に伝わったもので、原本は所在不明ですが明治時代に東大史料編纂所によって忠

実に影写されたものが残っています。内容は、親綱が駿府での抗戦をはじめ、方上城（焼津市）と葉梨城（藤枝市の花倉城）の攻撃で立てた手柄を義元が褒め、敵方が所有していた土地を恩賞として与える約束をしたものです。つまり、この文書は軍功に対する感状（表彰状）と、それに基づいた知行宛行状（褒美の目録）が一緒になったものです。これに対して、Bの文書は相馬中村藩（福島県）の家老職岡部家に伝わったもので、義元が親綱の軍功を褒めただけの感状です。しかし、どうせ褒めるのなら一通の文書で済ませばいいのに、なぜ二通も出したのでしょうか。

今度枕う礼を
望み他を廻袖抄

貴刺任書礼花蔵

先此報後亦は年

長久保氏に
作里義元孫末代

新徳忠良學末代

A 今川義元判物写（東大史料編纂所影写本）

B 今川義元書状（部分、藤枝市郷土博物館所蔵）

そこで両者を比較すると、いくつかの相違点に気付きます。まずAは主人が家臣に与える判物とよばれる形式ですが、Bは私的な書状で、そのため判物よりは丁寧な表現となっています。Aは堅紙という一枚の用紙に書かれているのに対し、Bは現在巻物に

仕立てられています。本来は切紙という横長の紙を用いて本紙と礼紙（白紙）の二枚からなっていたようです。礼紙を添えることは、相手に敬意を表すものです。Aは義元の右筆（書記）が書いたものですが、Bは義元の自筆によるものです。書状は一般的に日付だけで年付を省きますが、Bには年号が明記されています。これはこの書状が後世にまで残される、ということを考えてのことでしょう。内容面で比べてみると、褒め言葉がAでは「甚だ神妙の至り感悦なり」と、ごく一般的な表現となつていますが、Bでは「義元子孫末代に対し、親綱の忠節比類なきものなり」と、義元の感状として他に例のない最大級の賛辞となつています。このように明らかにBの文書は特別で、私信であるBこそ義元の感謝の念が強く表れていると思われれます。Bが示す功績の内容は、最初に「所々において他に異なることなく走り廻り、粉骨抽きんじ」とあつて、ここでいう「所々」での働きはAで述べていることと思われれます。ところがBではさらに「あまつさえ、住書の花蔵へ取らるるところ、親綱取り返し付けおわんぬ」という記述が見られ、これこそが親綱の特別な働きと思われれます。当時の他の史料に、義元の実母である寿桂尼が恵探方に味方したような記述が見られ、それはあり得ないことと考えられています。しかし、B文書の発見によりどうやらそれは事実で、寿桂尼は今川館から重要書類を持ち出して花倉に移つたと思われれるのです。

岡部親綱は各地の戦いで活躍しただけでなく、その重要書類を取り戻したことが大きく評価されたことが分かりました。ところが、今度はなぜ寿桂尼が実子である義元ではなく恵探に味方したのか、重要書類とはどんなものが新たな謎となりました。（中世担当調査委員 前田利久／清水国際高校教諭）

九世紀末の東海地震による津波・地盤沈下と古代東海道のルート変更の可能性

二〇一一年三月十一日の東日本大震災では、波高十数mの津波が仙台平野沿岸部を襲い、四〜五km内陸側にまで達しました。その結果、多くの家屋と人命を失いました。また、平野沿岸部では地盤沈下による浸水被害（石巻では最大一・二mの沈下量）もありました。各地の津波被災地では、現在、集落の高台移転による復興が議論されています。この大震災の経緯を踏まえ、市史で記述した古代東海道のルート変更問題を再検討したいと思います。

六六三年の白村江の戦いで新羅・唐の連合軍に敗北して以来、日本の政権は両国による侵攻に備え、律令を制定し、民衆に兵役を課し、各地の軍団に所属させ、全国的な軍事動員体制を作りあげていきました。幹線道路としての駅路は、駅馬や軍団を最短時間で通過させるため、平野部では最短距離の直線を原則とし、沿岸部の低湿地でも施工されました。しかし、小柳津低地（推定「志太の浦」）のような低湿地や水域では迂回せざるえないため、志太平野では屈折する直線駅路が施工されたようです。

ところが、志太平野でも小川駅（小川城跡付近）を通るルートが平安時代初期（一〇世紀頃）に廃絶となり、図の推定東海道路から推定郡衙経路へ、言い換えると沿海ルートから山沿いルートに変更されています。この要因として、市史では地球温暖化に伴ういわゆる「平安海進」による小柳津低地の湿地化が促進されたことと、律令国家の秩序維持の弛緩による駅制という駅馬による高速交通機能の維持管理が難しくなってきたことを挙げましたが、今

回の東日本大震災の被災状況から、第三の要因として九世紀末の発生が推測されている仁和東海地震を含む西日本巨大地震による、沿岸部の津波と地盤沈下による被災も検討する必要があると考えています。仁和東海地震は、貞観十一年（八六九）の東日本巨大地震の一八年後の仁和三年（八八七）に発生した仁和南海地震と同時あるいは連続して発生した可能性が高いとされています（寒川旭『地震の日本史増補版』）。

明応七年（一四九八）の東海地震では、波高七〜八mの津波が焼津市域を襲いました。一八世紀後半に書かれた『林叟院開闢歴史紀』には「大地震動海水大涌而溺死者凡二萬六千餘人成、林叟之舊地忽變而為巨海也」と書かれ（文献上の溺死者数には検討の余地あり）、この津波は、古代東海道が通っていたと市史で推定した小川付近の微高地を乗り越え、小柳津低地の東の淵に当たる三ヶ名にまで達したといわれています（江戸後期の『駿河記』）。

また、この地震と津波は浜名湖が外海とつながるといいう地形変更を引き起こしました。

なお、古代東海道のルート変更は以下の地域でも推測できます。静岡平野ではJR草薙駅付近を通っていた、丸子と興津を結ぶ約二〇kmの直線駅路が、南側の有度丘陵を通るルートへ、さらに浜松・磐田平野で

は馬郡から遠江国分寺南の中泉をつなぐ約二〇kmに及ぶ直線駅路が、北側に湾曲し、最大部分では二〜三kmも内陸側に迂回するルートへ、それぞれ変更されたと推測できます。

幹線道路ルートの大規模な変更や集落の高台移転は、海進のように徐々に湿地化していく現象よりも、津波や地盤沈下による深刻な被災が一度に広域に発生した場合の方が、行政としても住民の心理としても合意が得やすいものと思われれます。

東海地震は一〇〇〜二〇〇年周期で発生しており、平安時代にも複数回発生している可能性が高く、今後、志太平野での津波痕跡の調査が進めば、古代東海道の変遷と古代の地域社会の変貌がより詳細に検討できると思われる。

（古代担当特別調査委員 矢田 勝／浜松市立神久呂中学校教諭）

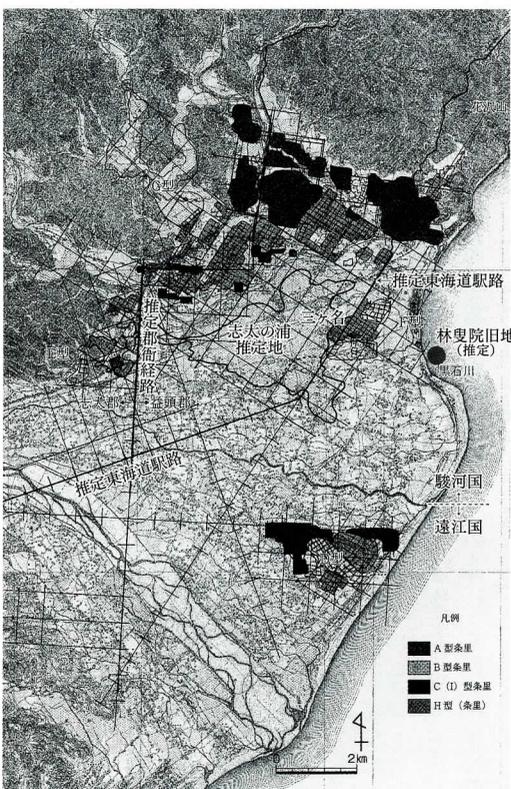
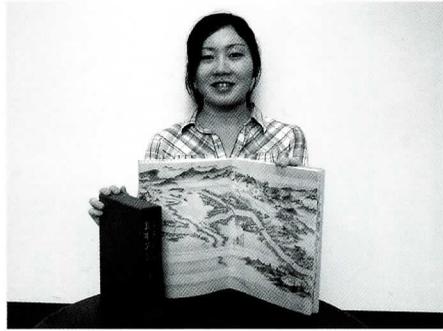


図 志太平野の条里型地割と推定古代道路（『藤枝市史』通史編上 付録図より）

45年ぶりにリニューアル!!

『藤枝市史』通史編下 近世・近現代 が刊行されました



通史編上 原始・古代・中世に引き続き、『藤枝市史』通史編下 近世・近現代が刊行されました。旧市史の下巻(昭和四十一年刊)から数えて四十五年ぶりのリニューアルです。これにより、通史編上下二巻が完成し、藤枝市史編さんの集大成となりました。通史編

をひもとけば、原始から現代までの藤枝の悠久の歴史が理解できます。郷土を深く知るための歴史事典として、幅広くご利用ください。

通史編下では、江戸時代から平成の大合併までの四二〇年の藤枝の歴史が詳述されています。第四編「近世の藤枝」では、田中藩・田中城・藤枝宿、市南部の新田開発・蓮華寺池用水を中心に記述されています。第五編「近現代の藤枝」では、藤枝の近代都市の形成過程や、旧市史で記述の乏しい戦後の藤枝市の発展について重点的に記述されています。なお、通史編下には、特別付録として『東海道分間延絵図』岡部・藤枝(複製)が つきます。

- 体裁 A5判上製本・八七六ページ・ケース入り
- 叙述した時代 藤枝の江戸時代から平成の大合併まで
- 構成 第四編 近世の藤枝

- 第五編 近現代の藤枝
- 価格 一冊四、〇〇〇円
- おもな内容
 - 徳川譜代の名門「田中藩」の治政
 - 藩主事績・家臣団構成・藩政改革・藩校の文武
 - 日本一の丸いお城「田中城」縄張りの特徴
 - 東海道五十三次の宿場町「藤枝宿」の構造と運営
 - 江戸時代の新田開発と市南部の人名地名の由来
 - 東海道鉄道藤枝停車場の開業と駅前発展
 - 志太・榛原の中核都市へ成長

近代都市への発展過程と都市基盤の整備など
販売場所 藤枝市郷土博物館

※お求めは、電話〇五四―六四五―一一〇〇
〒四二六―〇〇一四 静岡県藤枝市若王子五〇〇
郵送対応可能(本代を普通為替でご送付ください。
送料着払いでお送りします。)

◆通史編完成記念 特別付録『東海道分間延絵図』

● 体裁 A4版・カラー・折り本二〇ページ
複製サイズ 二九・七cm × ヨコ四二・〇cm
(原資料の二分の一)

※東京国立博物館所蔵の重要文化財『東海道分間延絵図』の市内東海道を複製。原本は、江戸時代後期(寛政十二年(一八〇〇)〜文化三年(一八〇六))に作成され、山川などの風景や街道沿いの人家、一里塚・橋・高札場などが描かれています。宿場エリアでも間屋場・本陣・社寺などが丹念に描かれています。

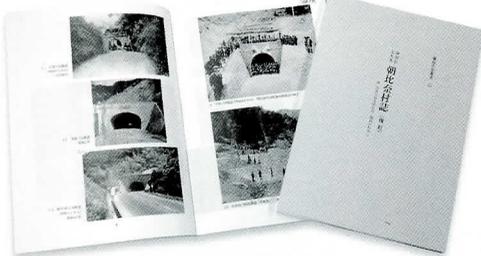


今回の複製部分は、宇津ノ谷峠から上青島村までです。今まで高価な美術図鑑でしか見られなかった絵図を、ご家庭で鑑賞いただければ、新しい発見があることでしょう。
※特別付録のみの単体販売も行っております。
〔一冊一、〇〇〇円〕

◆約一〇〇年ぶりに『朝比奈村誌』が復刻されました

大正初期に編さんされた『朝比奈村誌』を市史叢書として復刻刊行しました。手書きの原本を初めて活字化して印刷したもので、朝比奈地区の沿革が簡潔にまとめられています。巻末付録「写真で見える朝比奈・岡部のむかし」では、朝比奈・岡部地区の明治末期〜昭和四〇年代の町並みや懐かしい風景などを写真五四点で紹介しています。

- 体裁 B5版・モノクロ 八九ページ(村誌本文六五ページ+付録二四ページ)
- 価格 一冊六〇〇円
- 販売場所 藤枝市郷土博物館



社会貢献に尽くした藤枝の女性たち

明治、昭和、大正の近現代において社会的に活動・貢献した藤枝出身及び藤枝在住の女性たちを三名紹介します。

看護婦、産婆の地位向上をめざす

柘植アイ（日本産婆会初代会長 一八六四〜一九六四）

柘植アイ（愛

子）は一八六四年

（元治二元）志太郡

大洲村（現藤枝市）

に生まれました。

二三歳の一八八七

年（明治二十）に東京帝国大学医学部付属病

院で看護婦の訓練を受け、一八九〇年（明治

二十三）、同大学医学部産科婦人科教室・産婆

養成所を卒業し、同年四月に東京府牛込区横寺

町二番地で産婆を開業しました。そして産婆

を開業しながらも一八九七年（明治三十）、三三

歳の時には柘植派出看護会を開き、一九〇九年

（明治四十二）、看護婦の地位向上・風紀改善を

めざし日本看護婦会東京組合を結成。一九一五

年（大正四）には看護婦規則制定を実現させま

した。一九二七年（昭和二）、大日本産婆会結成

で会長に就任。女性参政権獲得運動にも関与

し看護婦、産婆の地位向上に努め、一九六四年

（昭和三十九）一〇〇歳の天寿を全うしました。

※折井美耶子・新宿女性史研究会編『歴史に生きた

女性一〇〇人』の中から石崎昇子氏（女性史研究

者）がまとめた柘植アイの略歴をもとに紹介させ

ていただきました。



保健婦として活躍、

高齢者問題にも目を向ける

大石さき（元保健婦・劇団ほのお代表）一九一六〜

大石さきは一九一六年（大正五）三月、志太郡

大洲村（現藤枝市）の農家に生まれました。尋

常小学校卒業後、働きながら看護婦養成所を経

て看護婦、助産婦などの資格を取得しました。

そして結婚、第二次世界大戦時は中国山西省に

わたり二人の子どもに恵まれました。戦後、保

健婦資格を取得し、藤枝市内で保健婦として母

子保健活動などに貢献しました。保健婦生活

三〇年の間には保健文化賞受賞などの輝かし

い功績も残しました。五八歳で定年した後、福

祉事務所の高齢者担当保健婦として働き、高齢者

問題に目を向けていきました。独居老人、家族

と同居の中での老人の孤独、老いや健康への不

安など、お年寄りの抱える問題をより多くの人

に伝えていきたいという気持ちが高まり、仲

間二〇数名で「劇団ともしび」を結成し、劇を

通しての問題

提起を実践し

ていきました。

その後「おばあ

ちゃん劇団ほ

のお」と改名

し、その活動は

現在まで続け

ています。

保母や保育内容の資質向上に努めた

岡野ゆき（青木橋保育園主任保育士）一九二四〜

岡野ゆきは、

一九二四年（大正

十三）沼津に生ま

れました。旧姓

は上柳。「結婚し

て家庭をもつて

世のため人のた

めに働きたい」と

女学校入学時の

面接試験で校長

先生に話し、その思いを成人するまで持ち続け

ました。一九四八年（昭和二十三）に結婚、以来

藤枝に在住し婚家の青木橋保育園で保母とし

て、また、舅、夫ともに亡き後、園長として園の

運営に長年関わってきました。この青木橋保

育園は、岡野和三郎の長年にわたる方面委員、

民生委員としての経験や、キリスト教信者とし

ての社会福祉への願望によって、藤枝で初めて

設立されたものでした。県保母会長、全社協全

国保母副会長としても活動し、保母の労働条件

の改善、保育内容の資質を高めるための研修会

の開催、時代的課題に対応した保育サービスの

充実などに尽力し、保育の専門職としての役割

を先駆けて担い、地域とも連携して今日に至っ

ています。



（ふじえだ女性史研究会 糟谷文江、井出紀美子、西澤功子）